



A L P S C A R E E R

<シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第23回>

私の生きがい 健康落語

落語との出会い（学生時代）

一九七〇年に群馬大学医学部に入学した私は、中学高校と六年間ブラズバンド部に所属していて音楽が大好きでしたから、入学直後は誘われてジャズバンドに入りました。しかし、仲良しになった同級生から突然落語研究会への誘いがあり、興味本位で稽古会に出かけたところ、ほぼ強制的に新入会員にされるはめに。二週間後に前橋市内のホールで発表会があるから一席覚えれば高座に上げてくれるといわれ、その言葉に乗ったのです。先輩から「空巣家小どろ」と高座名をつけてもらい、「堀の内」というあわて者の噺を暗記して無我夢中で初高座を務めました。多少なりともお客が笑ってくれた

のに気をよくして、その後すっかり落語に取り付かれてしまい、入学早々半年で好きな音楽から落語家に転身してしまいました。

六年間の学生生活は、落語を始めたこととで本当に楽しいものでした。毎日（休日も）部室で稽古するのが趣味となり、六年間で二〇席以上にネタを増やしたのは当時では会員中最高だったと思います。会長をやったりして四年間は会の中心であり「鬼の師匠」といわれるほど後輩の指導は厳しかったようです。この落語との出会いが私にとつて次第に生きがいになってしまふとは、卒業して医師になつたときには思いもしませんでした。

よく聞かれる高座名の由来ですが、「柳家小さん」にあやかって「小さんの小」



古橋 彰

港北福祉保健センター長

【ふるはし あきら】横浜市出身。産婦人科医を経て保健所医師に転身。大学から落語をはじめ、保健所に入って健康落語を確立した。1984年社会人選手権で優勝。横浜市職員落語愛好会演技部長。

を使い漢字を使わずにかなで「どろ」としました。空巣家は単なる語呂合わせです。現在所属している横浜市職員落語愛好会は横浜にかけて「湊家」という家号を多く使っています。しかし、私は気に入った名前を変えずに使い続けています。

社会人落語会の立ち上げ

医師となつて四年間は群馬県内にとどまっていました。落語を続けたい気持ちが強く、OBとして出演したり宴会で披露したりはしていましたが、活動は約三年間休止状態でした。四年目に大学落研出身の製薬会社社員と出会い、病院寄席を二人で数回行い、私が群馬を去る直前の一九七九年二月に他の社会人三人を巻き込んで群馬落語会を立ち上げまし



た。地元の新聞に取り上げられたり、FM群馬に出演し話題になりました。

翌年四月から川崎市内の総合病院の産婦人科勤務医となりましたが頻繁に群馬県内に出かけて活動しました。残念ながら一〇年くらいで群馬落語会は終わって

しまいました。一時は一〇人くらいに会員が増え盛会でした。自分としては落語が継続できたのでよかったです。

健康落語の始まり

一九八四年七月、横浜市役所の職員に採用され当時の保健所医師になりました。保健所の医師には地域に向いて「健康教育」と称してさまざまな情報提供等を行う仕事があります。医師の仕事をしてその上に趣味の落語が使えるかどうかという理由もあつたので、初めから健康教育に興味を持ちました。しかし当初は高齢者対象のときに医師として高血圧や糖尿病の話をしてから、和服に着替えて裏芸として落語一席をサービスするのが精一杯でした。その活動を続けるうちに一般市民は難しい話よりも楽し

い話のほうが喜んでくれるのを悟り、いろいろ工夫を重ねました。最初から和服を着て座布団に座って、最低限の健康情報提供・健康漫談・古典落語を行う現在の健康落語の形にしたのは平成になった頃からでしょうか。望みが少しずつかなうようで、落語を続けていてよかったです。

健康落語の内容紹介

高齢者を対象とした高座が一番多いので、その一部を紹介します。

「皆さん、健康には笑が一番いいんですよ。好きなことをして毎日を楽しんで過ごすことです。がん検診は無理には勧めません。特に気が小さい人はやめましょう。本当にこんな人がいました。あるがんと検診をやったら一ミリくらいの影が見つかったん

です。気が小さい人だからすぐに手術を先生にお願いしたんだけど、半年様子を見ましようといわれました。それがストレスで眠れなくなつてね。半年後

また検査したら大きくなっていなかった。結局二年間変わらなくて結果的にはよかったんだけど先生の診断はなんと(がんもどき)です。でもその人は二年間苦しんだから最初から検診をやらなければよかったです。

「病は気からとよく言いますよね。私はまだ産婦人科の医者で手術をしていたときの話です。麻酔がきれて痛がる患者さんに二回は鎮痛剤を投与します。多くはそれで寝てくれますが、たまに三回目を要求する人がいます。そのときは後の回復を考えて偽薬を投与するんです。もちろん、よく効く薬ですよと暗示をかけて。そうすると効果があるのです。あくる日、三回目の薬が一番効いたと感謝されるのです。これぞ気分的なもの。だから、毎日おまじないで常備薬を飲むのは心の健



康にはいいんでしょね。でもなるべく薬は飲まないほうがいいんですよ。」

このように検診のこぼれ話や薬の話、医者が話すともっともらしくて本当なのかうそなのか？ と相手に思わせる話が笑いをとるコツ。うそみたいな内容でも医療関係のことは医者が話すから乗ってくれるのです。題材には自分のことを話すのも笑いを誘えます。

「お酒やタバコのことをよく聞かれますが、私はお酒が好きです。理想は週に二日は続けて飲まないこと（休肝日）。でも私はそんな恐ろしいことはできません。年に一日くらいですかね、飲まない日は肝臓の検査をしたり酒の肴を十分に調整すれば大丈夫。でも休める人は休んでくださいよ。」

介護関係では自分の母親がここ一〇年くらいいろいろあるので、それを実話で語って楽しませています。七一歳で体調を崩し、始めは高齢者特有の医者めぐりをして診断がつかず、神経症から認知症を思わせる妄想の発生。一年以上にわたる主たる介護者父親のおかげで回復中に、父親の突然死、そしてその後元気になったことなどを笑いを入れて話します。

「一般に、女性は相手の男性が亡くなると急に元気になりますね。だから長寿は女性が圧倒的に多いんですかね。」

母は老人ホームで今も元気でぼけていませんが、あの時一生懸命介護した父親



のおかげと思いい、母の許可を得て披露しています。六〇分（一番多い）の高座の場合は、上記のような健康漫談と本当に意味ある健康最新情報（これはまじめに話します）を前半三〇分くらいやってから、小断して二〇分くらいの古典落語一席につなげ、その落ちで高座を降りています。

主な活動の場

健康落語の形での依頼は年間六〇件くらい。実際の年間高座数はここ数年八〇回を超えています。多い依頼は圧倒的に高齢者対象の健康教育です。これは地域での純粋な健康教室はじめ町内会主催の老人会や敬老会、老人クラブ主催の高齢者学級やことぶき大学、介護老人福祉施設への出前などです。そのほか生涯学級や各種団体の研修会、表彰式や委嘱式

のアトラクション、難病患者の交流会があり、依頼者は「楽しい内容でお願いします」と気軽に頼んでくれますが対象やイベントの内容によってはずいぶん苦労します。

後味が悪いのはお酒を飲んでいる席です。落語は話を聞くものなので個人的にビールを飲みながらくらはよいのですが、宴会はどうにもいただけません。中学校や高等学校の依頼もかなり苦労します。エイズ予防や覚せい剤予防で依頼されたことがあります、やはり大変でした。しかし、基本的に私は素人ですからどんな依頼も日程が合えば一応お受けしています。一つ一つの高座が勉強になるからです。

印象に残っている高座

学生時代の高座はあまり記憶にありま

熊さん「エイズに」!

熊さん「エイズを知って」も
古嶋彰さん 落語で問題点解説

熊さん「エイズを知って」も古嶋彰さん「エイズにかかった長男の...」
古嶋彰さん「エイズにかかった長男の...」
古嶋彰さん「エイズにかかった長男の...」
古嶋彰さん「エイズにかかった長男の...」

「エイズに」...
古嶋彰さん「エイズにかかった長男の...」
古嶋彰さん「エイズにかかった長男の...」
古嶋彰さん「エイズにかかった長男の...」



せんが、健康落語になってからはほとんど
ど思い出せます。認知症のデイサービス
はいつも緊張して臨みますが、家族から
「母が数年ぶりにほほえみました。」とい
われたときは、うそでもうれいもので
した。介護老人保健施設も同様に、車
椅子で具合悪そうな人が笑うと高座から

笑いの出陣29年 市職員落語愛好会
お堅い話を
上ネタに

介護保険やごみ問題など
市政PRに一役

見てほっとできます。大きな舞台でやる
ことは少なく、多くは地域の会館なので
高座作りは地元の方にお願ひしています。
珍しかったのは和室でコタツの上、体育
館で卓球台の上など、中には高くしてく
ださいとお願いすると、そびえるような
(?) 高座もあり驚きます。客数は最高
が横浜国際会議場の四千人、最低は保
健所の難病患者の会の一人です。どちら
も忘れられません。現在所属の横浜市職
員落語愛好会では自主発表会五〇回記
念の関内ホール大ホール、出前千回およ
び二千回の記念高座です。難しい対象は
保育園児や幼稚園児、ここで笑いがとれ
れば鼻が高いです。去年からは新潟県の
地震被災地に仮設住宅などに慰問に行っ
ています。喜んでもらうことで充実感が
増します。

落語の楽しさ・やりがい

私は落語が自分の人生そのものになっ
ています。年間八〇回以上の高座を務め
て五〇回以上寄席関連に出向くことを目
標にし、ここ数年ほぼ実行しています。
聞くのが好きな人はたくさんいますが、
演じるのが好きな素人は少ないでしょう。
笑ってもらえると快感となり、それがや
りがいとなります。私が好きなのは主に
古典落語。登場人物がみんな好きです。
八さん・熊さん・隠居さん・与太郎・お
かみさん・大家さん、みんな親しみがあ
り憎めない人物です。

聞く上では、ストーリーに溶け込むの
が楽しさを味わうコツです。一方、演じ
る楽しさは演者も楽しむことに尽きます。
学生時代は話を追いかけるのに夢中で、
お客さんは笑っても自分は楽しめていま
せんでした。今は余裕が出て、とにかく
高座に上がるのがうれしくて仕方ありま





せん。初心者にはとにかく稽古を積んで、一日も早く高座が楽しくなるよう努力を促しています。

私は、健康落語を確立してからは、医師の立場がうまく利用できそれがさらなるやりがいになっています。最近の食品をとり巻く事件や感染症情報は見近な問題だけに、住民の関心が強く保健所の医師が扱うには一番よいのです。いずれにしても日常の仕事が落語の題材にできるので、この上ないやりがいになっています。

落語を通しての仲間づくり

横浜市に入ってから間もなく職員落語愛好会に入会し、二五年近くたちました。この会を創設したのは中央大学落研出身



の石井氏であり終身会長を務めています。会員の流動はあるものの、二〇名前後の活動をしています。私は経験がかわれて、途中入会者ながらすぐに演技部長にしてもらい、会員の指導をしています。

定期公演会（にぎわい座・年二回）は継続していますが、会の主たる年間の活動は出前寄席です。各地から私の健康落語を含めて年間二〇〇回くらいの依頼があります。土曜日曜に一人ないし三人の演者でこなしています。普段の仕事はほとんどみんな違うので、酒を飲んでも旅行をしても話題は落語を中心とした内容になります。落語は本職を見ても二〇歳くらいで入門して、

一五年くらいで東京の場合は真打に昇進しますが、全盛期は多くは五〇歳から六〇歳代。学生時代から始めたり、職員で三〇歳から始めたり市の会員は様々ですが、定年以後が全盛期かもしれません。会長も私も、今後は共通の技術を持つ他の仲間

広く呼びかけて幅広くボランティア活動をしたと思っています。私が平日頃の健康落語で話している「健康寿命を延ばしましょう。その実現のためには、趣味に力をそそいで共通の趣味仲間と行動するのがいいですよ。」これを私も目指したいです。

私は落語以外趣味がありませんから、とにかく今の仲間を大切にするのはもちろん、今後は同じように落語をやっている人を見つけて生涯の仲間づくりをしようと考えています。

いれたいの展望

学生落語から三八年たち五八歳の今、健康落語の確立で仕事と落語が両立できるといふ充実した毎日が送れています。今後も健康である限りはしばらく続けられると思います。仕事を通じた依頼が多いので高座数が確保できていますが、数年後には仕事を離れる日が来ますので出番は減るでしょう。でもその後も自分の健康寿命を延ばすために、仲間とともに地道な活動ができるよう今から準備にかりたいと思います。古典落語はこれまでに五〇くらいのネタに挑戦してきましたが、まだいくつかがやりたいネタがあります。今ある得意ネタを維持しつつ新ネタに挑む予定です。健康落語は引き続き新しい医学保健情報等を取り入れて、さらに磨きをかけたいと思っています。